

## 証言者番号 50: ジェームズ・シャピロ医師

供述の要約: 2019年4月7日(裁定:p.504~507)

2017年、(中国の)新設大学が臍島細胞移植プログラムの開設に関心を寄せてきましたが、前述の通り私は関与しませんでした。その後、浙江大学訪問の招待状を受け取りました。正確な日付ははっきりしませんが、2017年11月頃だったと思います。肝臓移植・肝胆外科医の私は忙しく、時間を割いて訪問する気にはなれず、中訪はしませんでした。私の同僚たちは行きました。私の代理ではなく別に招待されていました。レイ・レジャド医師(現在は退職)が外科部長らに付き添って訪問しました。彼らは訪問中に臍島細胞移植研究施設の設計と運営について話し合い、エドモントンに研修に来る可能性を話し合いました。この訪問後、初めて何が起きているかを耳にしました。

次に医学部長室での会議に招かれました。附属第四医院の院長と10~12名の代表団が派遣されていました。院長は陳(チェン)教授でした。とても友好的な会議で、とても良い人々であり、臍島細胞移植の「エドモントン・プロトコール」(Edmonton手順書)による我々の実績に敬意を表してくれました。彼らとの話し合いは楽しいものでしたが、特に取り決めはしませんでした。しかし、アルバータ大学と附属第四医院との間で「了解事項の覚書」を交わすことになっていました。

署名はせずに、その書類に目を通していているときに、強制臓器収奪に関する詳細が私のメールボックスに入りました。このことに関する知識はあまりありませんでした。法輪功のデモンストレーションは毎週ダウンタウンの農産物直売所で目にしていましたが、それ以外にこの問題を特に認識していませんでした。このメールが目にとまり、メールの差出し機関に連絡を入れました。今現在、中国で強制臓器収奪が行われている証拠は何かと尋ねたところ、2017年に肝移植の学会誌から撤回された論文、ウェンディ・ロジャーズ教授の論説、ガーディアン紙のこの論説に関する記事、“British Medical Journal”(英国医学雑誌)の論文が送られてきました。これらを読み、この浙江大学が論文撤回の地域とつながっていることを認識しました。私にとっては停止信号でした。

医学部長と外科部長にこれらの4つの書類を送信しました。そして、私は「この件について危惧しています。私が今、知り得たことに基づき、強制臓器収奪という非倫理的な行為が一切ないと確信できるまでは、私自身も私のプログラムもこの大学との協力には一切関与できないと考えています」と申しました。

大学内での話し合いの後、大学側から私に「附属第四大学と協力する道が見いだせないだろうか?」と尋ねてきました。私は「非倫理的な臓器収奪という一線を超えていないという確証が必要です。確認できる方法を探ります」と答えました。

そこで国際移植学会のフランシス・デルモニコ教授に連絡を取りました。彼とは肝移植手術の仕事を通して、また、ハーバード大学で講義をしていたこともあり、以前から面識がありました。この件について彼と話しましたが納得のいく回答は得られませんでした。要点は、臓器狩りの詳細を監視する方法は

なく、一線を超えていない、非倫理的な臓器収奪が行われていないという確証はとれないというものでした。私は「確証が取れない限り、この大学とは共同研究できません」と答えました。

バチカン（ローマ教皇庁科学アカデミー）と中国とのつながりを通して、私のために監視してもらえる第三者の仲介者を設定できないか伺いました。しかし十分な対応は得られませんでした。明確な回答もありませんでした。

このため臍島細胞移植の研修に関して、この大学に一切協力しませんでした。非倫理的な臓器収奪の可能性が完全にはないと確信できるまでは、私も私のチームも協力をすることはありません。

フランス・デルモニコに連絡した日付は調べてみなければ分かりません。彼とはメールのやりとりがありました。一連の出来事は2017年に始まったので、その半年以内として2018年初頭まで続いたと思います。

そして、マシュー・ロバートソン氏とジェイコブ・ラヴィー氏による準備段階の論文も読みました。ドナー数に関するデータが、私の目から見て基本的にごまかされていることを、数学的な曲線や公式から示すものでした。懸念するに十分であると感じました。これは現実であり、現在も起こっており倫理的に協力はできないと思いました。

【シャピロ医師の大学に、中国からの学生を受け入れたり、中国の医学界と交流することの見返りを必要とする、金銭的なプレッシャーがあるか？】

そのことについては直接の知識がないのでコメントは差し控えますが、我々の医学部は財政的に苦しいと言えます。中国への協力を願う要因の一つは金銭的理由にあると思いますが、明確には分かりません。その可能性は非常に高いです。大学を代表する外科部長と医学部長の善意もあると思いますが、財政的要素もあることは確かです。我々が臍島細胞移植の医師団研修に合意していたら、さらに金銭的な恩恵も大学にもたらされたと思います。

【シャピロ医師が見聞きした中国に関する出来事に対し、移植に携わる医学界はどのように対処すべきだと思うか？】

まず最も懸念することは、少なくとも欧米社会では、自由意志と善意の行動から臓器が提供されている点です。欧米社会のいかなる医療センターでも、強制的に臓器収奪するセンターに協力していると見られたら、一般市民の視点から、善意による臓器提供の継続は危機にさらされると思います。この善意の臓器提供にかなり依存しているのですが、実際は盤石とはいえ、移植待機中に多くの患者が亡くなってしまいます。多くの臓器が切実に求められています。このため、私はエドモントンでかなりの件数の生体肝移植を行っています。私たち、そして他の人たちが一線を超えてしまったら、一般市民との信頼関係にヒビが入ります。私にとって最も重要なことです。

学術的な見地からは、非倫理的な行為がある場合、その科学的成果は公表されるべきではないと、個人的

に考えます。ここ数年、非倫理的な行為があったと思われる中国からの論文の撤回があった学術会議に参加したことがあります。中国での臓器移植が国際社会の基準に見合うことが確認されるまで、論文撤回は続けられるべきだと思います。

はい[私は国際移植学会の会員です]。

[国際移植学会のこの疑惑に対する寡黙な態度についてのお考えは?] お答えできません。私は国際移植学会の幹部ではありません。しかし、フランシス・デルモニコやその他の知人や国際移植学会の会員の反応にとっても驚いたことは確かです。中国は急激に変化しているから大丈夫だと言われました。彼らはこの「大丈夫」を深く信じていました。しかし私にはデータが見当たりませんでしたし、なぜ信じるのか理解できません。フランシス・デルモニコが中国でかなり時間を費やし、訪問したことは知っています。彼の派遣団やチームも同じでしょう。国際社会を代表し、高い倫理に則るものであるべき国際移植学会に期待し、頼っていました。おそらく自分よりも倫理観は高いと思っていました。この件に関しては一人取り残された感じですが。

[疑惑が投げかけられている移植手術を黙視することは殺人を見て見ぬふりをする事だ。なぜこのようなことを医師ができるのか?]

分かりません。何らかの形で日常の手術や移植の臨床から自分自身の倫理感を切り離しているのでしょう。なぜこのようなことが起こっているのか分かりません。専門家として、医師として一線を超えないように非常に注意しなければならないと思います。他の人が一線を超えているのはおそらく無知からであり、中国でそのようなことは起こりえないと信じているからでしょう。それ以上のことも考えられます。大量虐殺は起こりえないという信念が、複数のグループにより作り上げられ、吹聴されています。こんなところでしょうか。明確には理解できません。起こりえないという考えが基盤になっているのだと思います。